序

地域研究年報第41号は, 2017年10月22日（日）から28日（土）, および2018年５月20日（日）から26日（土）にかけて実施した筑波大学大学院地誌学野外実験の成果を特集したものである．この野外実験には24名（2017年），42名（2018年）の大学院生が参加し，呉羽，堤および山下３名の教員で指導に当たった．さらに，また，ちょうど本学に研究滞在していた金玉実氏（青島大学）に加えて，橋本操氏（愛知工業大学（現：岐阜大学））と矢ケ﨑太洋氏（学振PD）にも現地での指導協力をお願いした．昼間は，大学院生がそれぞれの研究テーマに関してフィールドワークを行い，夕食後のゼミでは，フィールドワークの結果報告に関して熱心に議論をした. 本号に収録された論文はこうした研究成果をまとめたものである.

今回の地誌学野外実験の調査地域は, 長野県上伊那地域である. これまで, 長野県内の松本, 諏訪, 長野, 須坂，飯田，佐久，飯山といった都市とその周囲を含めた地域が調査対象とされてきており，未調査地域として上伊那地域が選ばれたわけである.

大学院生が，地域とは何か，どのような特徴や実態をもつのかなどの点について，フィールドワークを行いながら把握するための対象地域として長野県は非常に適している．とくに，かつて長野県である程度以上の意味をもった「郡」がその単位地域として優れているように思われる．郡は，明治以降，県の下位に位置する行政単位としてのまとまりのみならず, 実質地域としての「まとまり」をもってきた. さらに，それは現在の地域としてのまとまりにも大きな影響を及ぼしている．例えば，かつての野外実験で対象とした下伊那郡には，個々の特質をもった多様で個別の下位地域が存在するが，飯田がその中心都市としての地位をもち続け，下伊那地域全体でひとつの機能地域的なまとまりが維持されてきた. これまで，長野県内で調査対象としてきた地域は，いずれもこうした性格を有している．ただし，現在，モビリティの増大とともに，そうした旧郡レベルの地域のまとまりは徐々に弱まっていることも事実である．しかし，こうしたレベルの空間スケールで地域的事象を解明することは，地域の本質を理解する上で重要なアプローチであると考えられる.

今回調査した上伊那地域は，伊那市とその周囲の市町村を含んだ範囲である．この地域を特徴づけている要素は複数あるが，その中でも重要なものは中央アルプス，南アルプス，天竜川，中心都市，産業，城下町などであろう.

上伊那地域は，西に中央アルプス，東に南アルプスと伊那山地に囲まれ，それらの中央部に南北に天竜川が流れる，自然環境に恵まれた地域である．こうした背景のもとで，さまざまなツーリズムが発展してきた．中央アルプスでは登山が発達し，とくに駒ヶ根市は全国から多くの登山者を受け入れる拠点としての地位を高めるとともに，地元ガイドを通じて地域住民とのかかわりをもつようになっている. また上伊那地域がもつ環境の良さは，大都市から多くの移住者を惹きつけている．行政の支援のもとで農村集落が積極的に移住者の受け入れを実施することで，人文・社会・自然環境に優れた上伊那地域が全国でも有数の移住地域となっている.

天竜川が形成した段丘上には，水田を中心とする耕地が展開するが，乏水性の扇状地も多い．用水路の開発によって大規模な畑作が展開するように変化した一方で, 農業人口の高齢化の進行とともに, ルーラル・ツーリズムの要素を導入した試みも定着している．農業に加えて工業もまた上伊那地域の立地特性を活かして発展してきた．1960年代頃から工業団地造成が盛んとなり，製造業部門等の工場進出がみられた．精密機械部門大規模工場の企業城下町的な性格が変化を余儀なくされるなかで，小規模な工場は保有する技術を活かして工業生産を継続させている.

伊那市は上伊那地域の中心地である．かつて江戸時代には天竜川の河岸としての機能をもち，行政中心地である城下町高遠と商業中心である赤穂（駒ヶ根市）と区別された．しかし，明治以降の行政改革等によって，伊那市は上伊那地域における，行政，教育，商業，交通の中心地としての地位を高めていった．そうした中で伊那市駅付近の中心商店街は大きく成長した．しかし，1970年代以降にモータリゼーションが進み，低成長時代となる中で，交通システムは激変した．同時に中心商店街の商業機能は，郊外型ショッピングセンターの台頭とともに徐々に衰退していった．周囲の農村集落では高齢化が進み，移動手段をもたない高齢者のために，移動販売やコミュニティバス，ボランティアタクシーなどの仕組みを整備している．中心商店街では，移住者によって新しい再生策が模索され，飲食機能の充実などによって中心地としての活性化が進んでいるように感じられる．

上伊那地域の文化の基盤には，高遠藩の影響が多大であるように思われる．宗教や葬儀のあり方は，ある程度隔絶性をもった山村では，その伝統的性格をかなり維持してきた．しかし，近代化のなかで，また，地域社会のつながりの変化，宗教と地域社会との関係の変化のなかで宗教や葬儀のあり方も変化を余儀なくされている．高遠藩の存在が上伊那地域の地域性に与えた影響は多々あるが，城址に植栽された桜もそのひとつである．開花時期には県内外から多くの花見客が訪れる．ただし，近年は観光資源としての桜の重要性は相対的に低下するなかで，花見客の停滞傾向が進んでいることや商店街とのかかわりをいかに実現していくかが課題となっている．一方で，かつて重要視された秋葉街道がトレッキングルートとして今日再評価され，新しいツーリズムの形態として期待されている．

本報告書は，さまざまな側面からみた伊那市をはじめとする上伊那地域の地域性を明らかにしようとしたものである．本冊子の内容が，上伊那地域やその隣接地域の人々にとって何らかの役に立つことができれば，地域研究の一端をになうものとして望外の幸せである．

現地調査に際しては，伊那市や駒ヶ根市の関係部署の方々に，資料の提供や閲覧の便宜をはかっていただいた．また，伊那市立図書館，伊那市観光協会，駒ヶ根観光協会，伊那商工会議所，諸公民館など数多くの関係機関の方々からも貴重なご意見やご協力をいただいた．さらに，聞き取り調査やアンケート調査のために訪れた事業所や農家，工場，商店，さらには市民の方々には親切に対応していただいた．加えて，調査滞在中の宿泊拠点としたホテル青木および羽広荘にもさまざまな便宜を図っていただいた．以上，記して厚くお礼申し上げる次第である．

2019年 1 月

呉羽 正昭